

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

令和3年 4月 30日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所 属 部 局 文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター

職 名 助教

氏 名 富 井 眞

助 成 の 種 類	令和2年度 ・ 研究活動推進助成			
申請時の科研費 研究課題名	出土状況の精査による環瀬戸内海の階層化社会における葬送儀礼の認知 考古学的研究			
上記以外で助成金 を 充 当 した 研 究 内 容	該当なし			
助成金充当に関 わる共同研究者	(所属・職名・氏名) 該当なし			
発表学会文献等	(この研究成果を発表した学会・文献等) 「岡山県北部の弥生時代中期後葉の住居址床面安置土器の向き」『古代吉備』 第32集			
成 果 の 概 要	研究内容・研究成果・今後の見通しなどについて、簡略に、A4版・和文で作成し、 添付して下さい。(タイトルは「成果の概要／報告者名」)			
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	1,000,000	円	
	使用した助成金額	1,000,000	円	
	返納すべき助成金額	0	円	
	助成金の使途内訳	費 目	金 額	
		国内旅費	536,250円	
		設備備品費	179,800円	
		消耗品費	283,950円	
当財団の助成に つ い て	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 新型コロナウイルス感染対策のために、資料収集は日程的にも費用的にも計画通りには実施できなかった のですが、柔軟に対応いただいたので、最終的には、予定していた作業対象資料の調査をほぼ終えることが できました。心より御礼申し上げます。今後も、令和2年度のような不測の異常事態がありましても、今回のよう に柔軟にご対応いただければ、助成対象者は安心して研究に専念できると思いますが、願わくば、そのような 場合には、助成金の1割程度は数ヶ月の繰越猶予が可能であれば、さらに安心できるかと推察いたします。			

成果の概要 / 富井 眞

研究の内容と達成度 西日本の前期古墳では、日常什器の側面も有する土器が供献品として副葬される際には黒化部が被葬者側を向かない、という斉一的傾向がうかがえるので、安置土器の正面観は当時の共同体構成員の認知構造の斉一性を反映し得ると考え、本研究では、その正面観の時空間的異動の把握を企図した。そして、単年度の個人研究助成であることを踏まえ、ケーススタディによるモデル構築を目標とした。具体対象は、初期国家形成過程で中枢地域の一つとなった吉備一帯の弥生時代～古墳時代前期の、供献土器や土器棺・埴輪棺など葬送に伴う土器類および遺構に安置・残置された土器である。

本研究は、コロナ感染対策により資料調査計画の大幅変更を余儀なくされた。資料収集を実施できなかった遺跡があったほか、資料調査が非効率的になり年度末までずれ込むなどして、データの処理と解析が未了の遺跡も少なくない。しかし、当初見込んだうちのおよそ9割（土器個体数で600点以上）の資料を調査できたので、それらの基礎データは確保されている。したがって、全体的傾向を俯瞰することは現時点ではまだかなわないが、これまでの調査で確認できたことを、次項にて述べる。

研究の成果 土器の黒化部の向きを同定し、天地など体位との相対的な方向性や、東西南北という絶対方位などに照らしながら、葬送に伴う土器類とその他の安置土器とに分けて検討した。

①葬送に伴う土器類 弥生時代の前期から中期にかけては事例数が少なく、土器棺が一遺跡で複数が出されている遺跡は限定的で、出土記録に照らして土器の向きを確認できるものはさらに数が少なかった。土器棺は横位のものほとんどで、岡山市東部の百間川沢田遺跡では、2基を確認でき、黒化部は天方向を向くものと地面側を向くものだったが、30 kmほど西方の矢掛町吉野遺跡では、検出された大小各1基の土器棺はともに黒化部が天を向いていた。

弥生時代後期の土器棺は、多くが横位に安置される。少数が確認される遺跡が各地に散在しており、まだ全体的な概要を把握できていないが、10基以上まとまって検出されている遺跡を見ると、岡山市東部の百間川原尾島遺跡では、黒化部のない個体が多いが、黒化部を持つ個体では、絶対方位とは目立った相関性はうかがえない一方で、半数以上が天を向いていた。約10 km西方の岡山市西部の足守川流域を見ると、甫崎天神山遺跡では、黒化部の向きは、相対的な方向性でも絶対方位でも、いずれかの方向に収斂するような顕著な傾向は見られない。その東側近傍に所在する岡山市津寺遺跡でも同様である。しかし、さらにその東側近傍の加茂政所遺跡においては、黒化部の向きを確認できるものでは、地面側～右側を向くもので占められる。この遺跡では口縁方位を確認できるものは1基を除いていずれも北東～南東方向であり、したがって、黒化部は地面側から南側を向く傾向が強いと言える。さらに数km西方に位置する総社市前山遺跡の場合には、土器棺には黒化部が目立たない個体が多いものの、黒化部が天を向くものは1基しか確認できなかった。

津寺遺跡では、続く古墳時代前期にも10基以上の土器棺がある。この時期には、黒化部が地面側を向く例が過半数に達するようになり、多用度の逡減化と黒化部の忌避傾向を指摘できるかもしれない。

なお、北部の美作地域には、土器棺が10基以上まとまって出土する遺跡は確認できていない。1遺跡で複数確認されている場合では、弥生時代では遺跡内で特定の傾向を示すことはないようだが、古墳時代前期には、横位の土器棺2基が検出された真庭市の下長田上野遺跡ではともに黒化部が天を向いていた。前期古墳の供献土器では、鏡野町の赤峪古墳では黒化部が被葬者と反対側を向いており、これまでの研究で明らかにしてきたような広島県赤羽古墳や香川県六ツ目古墳など、瀬戸内海沿岸域の事例と同様である。

②その他の安置土器 葬送に関わる安置土器の少ない弥生中期については、住居址床面から複数の土器が安置されていた例にも注意した。例えば、美作地域の津山市金井別所遺跡には、6個体の壺型土器が横位で出土した住居址があり、向きを確認し得た5個体はいずれも黒化部が地面側だった。（この事例は、本研究の着眼点の重要性を示すので、研究ノートとして速やかに投稿した。「発表学会文献等」参照。）

今後に向けて 収集したデータの整理・解析を完了することは無論として、時期区分をより細かくした時期的異同を検討しておきたい。土器の種類や残存部位によっては細分ができなかったり、細分によって一遺跡当たりの母数減少を伴って傾向抽出の信頼度を低下させたりするものの、足守川流域のような遺跡の密集地帯であれば、小地域内でも高解像度で変遷を把握できる可能性がある。母数確保のために複数遺跡を同一カテゴリーに組み込むのは、細かな集団的異同を論理的に不可能にしてしまうが、現段階としては、今後の研究の進展のためには、議論の目的に応じて大別時期での議論用のモデルと細別時期での議論用のモデルを使い分けるべく、2種のモデルを構築したい。